

國學院大學學術情報リポジトリ

与謝野晶子の欧州旅行とその後の展開について：
国際的精神と帝国主義：
小特集日本近現代文学・その交通と交差

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: カッポンチェッリ, ルカ, Capponcelli, Luca メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000241

与謝野晶子の欧州旅行とその後の展開について

— 国際的精神と帝国主義 —

ルカ・カッポンチェッリ
Luca Capponcelli

開国ならびに明治維新以降、日本では欧米との交流機会が増えていった。この状況を背景に、海外に渡り、活躍した日本人のケースもまた多くなっていた。渡欧および渡米した日本人は外交、科学、文芸などの様々な分野で活躍し、西洋における日本文化に対する知識とその受容に貢献したとともに、日本の近代化に貢献する人物もまたいたのである。女性はやがた、その中で川上座の貞奴は1898年のパリの万国博覧会で出演し、そのエキゾチックな歌舞や着物姿で人気を得ていた。また20世紀初頭にベル・エポックが盛んなパリで活躍し、ロダンのモデルにもなった女優、太田ひさ（花子）は、浮世絵等で既に

知られていた踊り姿の他に、演技する日本人の身体として当時の西洋人の想像を膨らませ、注目されていた。しかし、貞奴と花子が代表する日本文化は、西洋で作られた東洋の表象であるエキゾチックさとロマンスに重なり、ジャポニズムという風潮を通じて捉えられていた。貞奴と花子はジャポニズムを具現化するものであったと言える。

その反面、日本における西洋の表象は様々な側面を孕んでいたが、西洋文明は近代化、すなわち封建的慣習からの解放と未来の日本の構築への願望に重なる傾向が強かったと言える。そして文芸表現の世界においてこれは、新たな創作の模索へと繋

がつていく。日本近代小説の形成への第一歩として評価されている坪内逍遙の文学論『小説神髓』は、西洋のノベルの概念からの影響が強い。詩歌の世界においては、西洋詩との出会いを経て、北村透谷や島崎藤村の初期新体詩は理想の恋愛と個人主義という二つのキー・ワードを軸にし、近代詩歌への道を開拓したが、それは短歌表現にも受け入れられ、与謝野晶子の『みだれ髪』の歌作において、恋愛及び自己の自由がその近代的精神の表れとなる。また、『明星』がもたらした新しい文芸感覚には、ラファエロ前派やアール・ヌーヴォーなどの西欧文芸の受容が大きな位置を占めている。開国以来、日本が接してきた諸国の中で、文芸表現者にとってフランスは特に憧れの対象であったと言える。19世紀に6回も万国博覧会の舞台となり、コスモポリタンの雰囲気満ちたパリには、各国のアーティストが集まり、日本人もその魅力を感じていた。1900（明33）年第6号の雑誌『明星』には、画家の浅井忠が送ったパリの国際博覧会からの通信が掲載され、当時のパリのアール・ヌーヴォーの精神を代表するアルフォンス・ミュシャの作品を模倣した藤島武二の挿絵は、『明星』の特徴である文学と絵画の共鳴をもたらしたのである。明治末期以来、浅井忠、黒田清輝、永井荷風、島崎藤村など、日本から実際にフランスに行った芸

術家と文学者も少なくなかった。20世紀初頭のパリは、各国からの才能によって形成された文芸の都会として名高く、日本の文壇においても同様に認識されていたと言えるだろう。

萩原朔太郎の詩「旅上」の冒頭に「ふらんすへ行きたしと思へども、ふらんすはあまりに遠し」があるように、日本の文学者にとってはフランスという国への憧れの背後には、日本の近代化および世界文学としての日本近代文学への抱負が投影されるものがあつた。当時のヨーロッパの文化的な中心であるフランスおよび西洋という他者の表象は、日本の近代アイデンティティーの構築に深く関わる存在であつた。それ故、フランスは実在する国でありながら、日本の未来への願望が託された抽象的なトポスという意味も持っていたと言えるであろう。

そして、日本の近代短歌の発展過程に大きな実績を残した与謝野鉄幹と与謝野晶子は、雑誌『明星』の廃刊後の経済的な困難と精神的な苦悩が耐えられなくなった時、その行き詰った現実から脱出するために、フランスをはじめとして、欧州の旅に出る。

本稿では、与謝野晶子を中心に、洋行の体験がその後の創作活動および思想形成において占める位置について考察を行う。晶子は11人の子どもを育てながら、家庭の経済の支えとなる

おびただしい量に至る執筆活動を行いながら、妻と母であり、フェミニストであり、文学者であるという非常に豊かなパーソナリティを持つ人であった。このような多才な人物がヨーロッパ旅行から得たものを日本でさらに展開させたのである。四番目の息子がパリで会ったフランスの彫刻家ロダンと同じ名前、オーギュストを与えられたのも、欧州旅行が与謝野夫妻にとつていかに重要な体験であったかを多く物語っている。しかし、「君死にたまふこと勿れ」で厭戦詩人という評判を残した晶子は、1942年に戦争に召されたその息子に「たけく戦へ」という言葉を捧げたこともあった。これは一方で偶然の事実のように見えるが、他方では非常に象徴的な意味を含んでいると言えよう。すなわち外国に行った晶子と外地拡大を進める日本帝国への晶子の肯定的な姿勢との間には、如何なる接点があり、それが彼女の執筆活動にどのように現れるのか、という問題点を考えるべきであろう。したがって、この問題を念頭に置きながら、本稿では洋行体験以降の晶子の思想的展開を、彼女の文芸感覚、フェミニズム活動、そして昭和時代の帝国主義に対する姿勢を通して読み解いていきたいと思う。

一、晶子の洋行決意の経緯

日本では、与謝野鉄幹がパリから発した文芸の刺激を雑誌『明星』が追及していた新しい文芸感覚に取り込まれ、1900(明治33)年より詩歌、小説、絵画などの多分野にわたって、日本の文芸に新風が吹き込まれていた。しかし、自然主義の台頭と共に、『明星』派は次第に文壇において主流の位置を失い、売り上げも激的に減少しはじめた。そのうえ、石川啄木、吉井勇、北原白秋などの重要な同人は次々に脱退し、『明星』は1908(明治41)年11月に廃刊を迎えるに至る。1913(大正2)年6月5日から9月17日にかけて『東京朝日新聞』に連載された与謝野晶子の『明るみへ』は『明星』の廃刊後の与謝野夫妻の生活の記録として読むこともできる。そこでは、主人公の京子は『金星』誌の終刊後、文学界において自分の役目を見出せなくなった旦那(八坂透)の心境をこのように描いている。

良人はダリアの根の下にある穴より出で来る蟻を錆包丁にて叩き廻すことを致し居り候。二時間経ちて書斎を出でて眺めて候時も、三時間経ちたる時も良人は変わらずじつ

と蟻の張番を致し居り申し候。

「あなた、また蟻なんですか」

情けなげに私は云ひ候ふ。

「憎らしいからね。」

と良人は申候。面白ければとは申さず、憎し憎しと良人が
錆包丁にて土を叩き居り候こと、世にかかる悲しさ事また
あるべしと私は思はれず候。

文学の世界に忘れられそうになった夫の透は、フランス語の
勉強以外、いたずらに日々をすごしており、その姿の深い寂し
さに京子は同情する。一方で執筆活動、子どもの面倒などで、
妻の京子が家を支えており、晶子の現実を反映するかのような
状況である。夫妻の關係に悪影響を及ぼすことを懸念して、京
子は透の鬱状態が治るように、彼に海外の旅を勧める。京子は、
夫婦關係の危機と夫の実存的な苦悩を解決するために、透の渡
仏を企画するのだが、これは実生活の晶子の本音だと考えても
良いであろう。近代短歌の形成過程に大きな実績を残した「鉄
幹」という筆名をすてて、本名の「寛」で書くようになった夫
は、いい評価が得られなくなり、時代の風潮としては古いイメー
ジを帯び始めていた。晶子は彼が立ち治ることを願い、『明星』

が盛んな時期と同様に彼を理想化する必要を感じていたと考え
られる。しかし、経済的に困難な生活を送っていた与謝野夫妻
にとつて、このような企画は無理であつた。鉄幹の洋行の資金
を集めるために、晶子は金尾種次郎の協力を得て、自作短歌百
首を屏風に書き付けたものを売り、また「東京朝日新聞」に与
謝野寛（後に晶子も）が定期的に海外から通信を送ることで遊
学費の一部を得ることになり、洋行の資金が調達できるよう
なる。そして、1911（明44）年11月8日に神戸港から出発し、
1カ月後フランスに到着したのである。

上記のように、鉄幹の洋行の切っ掛けは、晶子と鉄幹にとつ
て何よりも困難な現実からの脱却という意味があつた。
1912（明45）年に刊行した晶子の歌集『青海波』において、
この事情に関する言及がみられる。

海こえて君さびしくも遊ばらん逐はるる如く逃るる如く

フランスに行くことによって自分の新しい世界の発見を求め
る鉄幹は、上記の晶子の短歌で追放されたもの、亡命する者とし
て描かれている。このように、鉄幹が向かうパリは『明星』
廃刊後の困難な生活とは対照的な憧憬の世界であるが、抽象的

なへ向こう側としてのマントに包まれ、その遊学に対する期待と目的よりも、夫からの距離というモチーフに重点がおかれている。これによって、鉄幹が理想化されると共に、遠く行っている夫への思いも『青海波』の一つの主要なモチーフとなる。^③

男行くわれ捨て、行く巴里へ行く悲しむ如くかなしまぬ如く
東京に雪雲くれば遠方をふたがるごとく急ぎ文かく

ねがはくば君かへるまで石としてわれ眠らしめメヅザの神よし
ろがねの小き蛇が夜も晝も追ふべき君が大海の船

逢見ねば黄泉とおもふ遠方へたからの君をなとやりにけん

上記の例で分かるように、鉄幹が向かっている西欧は晶子の現実から離れた海の方にある抽象的なトposとして表れる。そして、現世（現実）と向こう側との境目を定めるへメドゥーサ▽およびへ黄泉▽のイメージは、未知な世界としての海の方の描き方に伴う、不安な気持ちを表している。

そして、1912（明治45）年5月に晶子もパリへ旅発つ。『青海波』における短歌表現では、寂しさの余り鉄幹に会いたい気持ちに旅の理由として歌われるが、『明るみへ』に見られるよ

うに、京子自身の自己再生という複雑な心境に関わる決心である。透の出発後、京子は自己分析ができるようになり、夫との関係、また、自己の新たな展開を見出す切っ掛けとなる。

一昔前に私は寂しいひとりぼつちの娘であつたればこそ、
新しい果実の皮を剥ぐやうに、自分の純な命を開いて真剣に自分の恋を作り出すことができました。私の芸術は命から迸る血の飛沫でした。私は再び経験するひとりぼつちはを前へのし出して何を掴ませようとするのでせう。私の今視いて居るのは底のない恐怖のやうにも思はれます。^④

このように、夫の出発が京子の自己再生に必要な条件として述べられており、後の展開に対する不安を抱きながら、新しい我および新しい芸術への模索に向かう京子の姿は、晶子自身の伝記的な描写だと充分に考えられる。『明るみへ』の暴露的な性質は、逸見久美が指摘するように当時主流になっていた自然主義の影響を受けていると認めざるを得ないのである。^⑤ また、文学作品としては、これは晶子の唯一の長編小説であり、表現の面では大きな転換期を表している。加えて、晶子と鉄幹のヨーロッパへの旅に関する決意の経緯が理解できるという点からも

貴重な作品だと言える。しかし、煮詰まった現実からの脱却という遠心作用的な精神は、物語の展開において重要な位置を占めているものの、その行先となるパリはまだ二人の現実にはない、抽象的で理想化したトポスである。

二、晶子はパリへ行く

1912（大元）年5月5日、晶子は敦賀市の港よりウラジオストクに向かい、そこからシベリア鉄道でパリに向かった。旅費と滞在費は『東京日日新聞』の通信の報酬で、また出版社「実業の日本社」、雑誌『婦人画報』および金尾種次郎の協力で調達することができた。

それまで晶子にとつての最大の旅は、鉄幹と同棲するために堺市から大都会の東京へ向かうものだったが、今回は、日本からヨーロッパの文化的中心となるパリに向かっていた。そしていよいよ、2週間程の旅が始まる。電車に乗った時の晶子は「云ひ知れない不安と恐怖」⁶⁾、「終ひには両手で顔を覆ふてしまつた。」という心の状態を記す。「巴里まで」という旅の記録は、電車のスピードに合わせているかのように、窓から流れる景色、人の乗り降り、次々に起こる小さな出来事とともに述べられる

作者の気持ちなど、流動的な記述である。例えば、どの駅でも自分の姿を訝しめに見つめるコサック兵士と支那人、見にくいロシア風の女性との相席、聖母マリアに例えられる金髪で美しい女とその子供の姿、バイカル湖の風景など、これらの記述では未知なる異国の人々や風景との接触による晶子の緊張感が漂っている。また、晶子の事を女優だと思った紳士と若い婦人がいたことは、当時ヨーロッパに向かう日本人女性の一人旅がいかに珍しいことだったかを物語っている。電車の揺れで眠れないことや各国境を渡る度に新たに発生する料金が払えない不安など、不愉快な思いが記されていると共に、電車の窓から流動する風景の叙述は、渡る国々の人々の様子を文学者の目で観察したものである。

5月19日にパリに到着した時から、鉄幹との欧州の体験が始まる。上記に述べたように、『明るみへ』において、晶子の渡欧の動機は主に彼女の内面にあり、特に西洋に対する知識を深めようとする欲求は明確に述べられておらず、小説における西洋の認識は具体性を欠いている。『明るみへ』は晶子の帰国後に書かれたものの、京子（晶子）が夫の後を追ってフランスに行く決意でおわる。研究者の間では、晶子が小説の後編を書く気持ちがあったと推定されているが、それを断念した理由は帰

国後も鉄幹が詩壇に復帰せず、再び憂鬱になったことと関係があると思われる。つまり、明るみへ到達するところまでの小説の世界を描こうとする晶子は、理想と現実が一致しなかったもので、後編を書かなかったわけである。^⑦しかし、小説にも示唆されているように、晶子は新たな自己および新たな自己の芸術を求めている。したがって、入江春行氏は晶子が鉄幹の執筆を読んで、自分も行きたい衝動を抑えきれなかったと推測したのである。^⑧そして、歌集『夏より秋へ』に収められた短歌には、7人の子供を置いていく悲しみと良人に再会したい気持ちとの葛藤が込められている。

このように、『明るみへ』において海の彼方にある抽象的なトポスに過ぎなかった西欧は、『巴里より』に集録されたヨーロッパからの通信において、非常に具体的な観察対象となる。殊に、晶子の視線は風俗、芸術、女性の社会的地位などに届き、幅広く現実を凝視する姿勢が見えてくるのである。

三、ロダンとの出会い

与謝野夫妻はノートルダム大聖堂、ルーブル美術館、モンマルトルの丘などのパリ見物、そしてベルリン、ロンドンなどの

他の大都會を見物し、西欧の芸術、芝居、そして当時ちょうど勃興する未来派という最新の文芸運動に触れたが、晶子の記録によると、彼女が一番感動した体験はフランス彫刻家ロダンに会えたことであった。

晶子はその出会いを次のように回想する。

私は今その日のことを想ふと實に冷汗が出ます。翁の前に出た私は一片の瓦にもいとしく、ひともとの雑草にもひとしい無知な一人の日本の女であつたのです。翁はわたしに向かつて何か云はれて、其れを男達に訳して貰ふ度に、私は誰だ痴鈍な微笑の下に點頭うなづいてばかり居ました。(…)私は白痴の小児が青空を仰ぐやうに我を忘れて翁の偉大な愛のエマナシオンの中に翁の顔を凝視し、翁の聲に聞き惚れて居ました。(…)翁は一見して國界と種族とを超過した世界の眞人だと云ふ氣がしたに過ぎます。翁に對して居ると仏蘭西に居ると云ふ心持を全く忘れます。(…)翁は嚴肅も、雄大も、優雅も、高潔も、繊細も。情欲も、苦惱も、その他の何物も寛容して餘さない絶對の愛其物の實現です。^⑨

時空を超越する神秘的な体験のように、その時の緊張を叙述する晶子は、鉄幹とフランス語が話せる友人画家の松岡曙村と一緒にロダンを訪れた。出発前に有島武郎に頼まれて、晶子と鉄幹は『白樺』のロダン特集号をロダンに手渡した^⑩。また、以前ロダンのモデルだった女優の太田ひさ（花子）についての話をし、森歐外の小説『花子』にロダンが登場することをフランスの彫刻家に教えて、帰国後に送ると約束する。

ロダンとの出会いを心に刻んだ晶子にとっては、フランスの彫刻家が芸術至上主義の具現化されたものであった。晶子は1917年のロダン他界した時、彼を忍ぶ数首の短歌を作り、後に歌集『火の鳥』（1919年）に収録する。その中で、「ああロダン君は不思議のカテドラル巨大の姿よろづ代に立つ」は晶子の目から見たロダンの偉大さをよく表している。

四、欧州の女性を観察する晶子

フランス滞在中の晶子は美術のみではなく、日常の風俗にも関心を示している。パリ滞在のはじめに、晶子はまずフランス人のファッションに目を奪われる。

巴里へ来ると、先づ目に着くのは仏蘭西の男も女もきやしやな体をして其姿の意気な事である。勿論一人一人を仔細に観るなら各の身分や趣味が異ふ儘に優劣はあらうが、概して瀟洒と都雅であることは他国人の及ぶ所で無からう。仏蘭西の女と云へば、其れが余りに容易く目に附くので、どの珈琲店にも、どの酒場にも、どの路上にも徘徊する多数の遊女が代表して居る様に一寸思はれるけれど、自分は矢張コメデイ・フランセエズの様な一流の劇場の客間に夜会服の裾を引いて歩く貴婦人を標準として、其れに中流の生活をして居る素人の婦人の大多數を合せて仏蘭西の女の趣味を考へたい^⑪。

細かいところまで自分の個性を表すフランスの女性の洋服の趣味に感心する晶子は、その美的感覚に関して次のような説明を試みる。

今姑く自分の歐洲に於ける浅かな知識で推し量ると、仏蘭西の女の姿の意気で美しいのは、希臘や伊太利から普及した古い美術の品のよい瀟洒な所が久しい間に外から影響したのでは無いか。ルウヴルの博物館にある伊太利の

絵と彫刻とを見た丈でも自分は然う云ふ事が想像される。

(…) 殊に女優の形と云ふものは希臘や伊太利の古美術に現はれた人体の美しい形を細密に亘つて研究して居るらしいから、其女優の形が上中流の婦人社会に影響するのは当然であらう。

このように晶子はフランスの女性の美的感覚をヨーロッパの古典美術および当時の人気女優に関連づけようとする。その反面、着物姿でパリの街を歩くと、見世物のように見られていると感じる晶子は、「白足袋を穿いて草履で歩く足附が野蛮に見えるらしい」ということに気が付くが、コルセットには慣れないという。そしてこれを機に、後年の写真でも晶子がよくかぶる花の飾った帽子を買うことにした。洋服、女性の髪型（『欧州婦人の髪』）などの風俗をとりあげる通信は『婦人画報』に掲載されていたので、晶子はその雑誌の読者が求めるようなネタも意識していた側面もあったはずだが、西洋の女性への彼女の観察は決して洋服と髪型に止まらなかった。鉄幹と共にロンドンを訪れた時、晶子は英国女性の外見についての言及を女性参政権問題についての考察へと展開させる。

表面の観察ではあるが巴里を觀て來た目で評すると概して英国の女は肉附の堅い、骨の形の透いて見える様な顔をして居て、男と同じ様な印象を受ける赤味がかった顔が多い。世界の都を代表する顔で無く幾分田舎らしい顔で、目附は勿論一体の表情が何処となく真面目と伶俐とを示して居る。巴里の女の様な粹な美には乏しいが愛と智慧とは富んで居相である。巴里の女は輕佻で無智で執着に乏しい相であるが、英国の女は其反対の素質を余計に持つて居るのではないか。女子参政権問題の生じた事などに種々の複雑した原因はあるにしても、其主たる原因は外面の化粧に浮身を襲す巴里婦人と異つて、女子教育の普及した結果内面的に思索する女が多数に成つたからであらう。或は男に近い教育を受け、男と斉しい資産を持つて独立の生活をして居る為に、自然その容姿までが一層男に近く成つて來たとも云はれるであらう。参政権問題に就ては急進派の婦人が男子も最早現代に敢てしない様な暴動を相變らず実行して識者を聳慄させて居る。併し或階級の婦人が男子と対等の資格を要求するのには拒み難い真理がある。其れが偶 参政権問題となつて鋒先を示して居るのだと思ふ。

(…) 急進派の暴動を生ずるのも一時の過程であらう。時

期が熟したら温健な主張の婦人の手に由つて一切婦人問題に識者を満足さす解決が附けられるに違ひない。自分は堅実な英国人の間に起つた婦人運動が決して空騒ぎで終らない事を信じる。唯だ英国の現代の婦人は日本の婦人よりも更に切迫した過渡期に遭遇して居る。其れが為に容姿の美を疎かにする迄に賢くならうとして居るのが悲惨である

上記の文章には、次の部分に重点を置くべきであろう。晶子の見解は、イギリスがほかの国より男女平等に近づいているという印象を述べている。その原因はまず女性の教育と経済的な自立にあると述べる。そして、インテリ階級を矚感させる女性参政権運動の過激派による暴動を明確に咎めないで、参政権の獲得をめざす戦いの一つの過程として認識し、暴動を別としてイギリスの女性参政権の成功の見込みが高いという。最後に、イギリスの女性は女権拡張のために注いでいる同様の力を外見にも注がないのは残念だという。これに比べて、フランス社会の女性は自分の美しさに気を配るが、その反面「巴里の第一印象」という執筆には、晶子が巴里で目撃した娼婦の問題に着目する。

自分は偶然の機会に由てモンマルトルに下宿して居る。

其れが遊樂の街である事を知つたのは巴里に着いて後数日の事であつた。自分は之に由て艶冶を衒ふ或階級の巴里婦人を観察する事が出来ました。併し是れ等の仮装の天使が真の仏蘭西婦人の代表者で無い事は勿論である。是等の賤劣なる婦人と交際する男子を仏蘭西の道徳が排斥するのは日本の其れと同じであらう。而して自分の驚く事は其等の娼婦の需用者が概ね英米其他の諸外国より来れる旅客である事である。常に婦人を墮落させる者は婦人自らで無くて、男子の不道徳に原因すると信じて居る自分は、同じく巴里の遊里を盛大ならしめる者は、其富と不良な好奇心とを以て異邦の若き女子を戯弄する事を恥ぢない英米の偽善的男子であると想像する。(…)なぜに是等娼婦の増加を防止する運動が教育ある仏蘭西の紳士貴婦人の間から起らないかと怪しんで居る。まさか仏蘭西人は是等の放逸な歡樂を以て外国の旅客を巴里に招致しようとするのでもありませんまい。仏蘭西には誇るべき芸術、哲学、科学、及び卓越した天然の景勝を沢山に持つて居るではありませんか。或人は之を以て仏蘭西の自由を称揚する様ですが、併し自由とは決して惡徳の異名で無いと思ひます。

芸術、哲学、科学に優れているフランスは、娼婦を観光客の呼び物にする必要はないと訴える晶子にとって、女性身体の商品化が道徳の問題のみではなく、女性の社会的地位の上昇を阻害する現象として解釈する。日本との類似点を指摘しながら、晶子は中階級の女性の教育の重要性を強調する。

貴女とは今日及び将来に於て最早爵位や物質的の富に由て定まるもので無く、家庭及び社会に貢献する実績に由て決するものである以上、又優秀なる教育の必要が益益一般婦人に自覚せられて行く以上、必ず真の貴女は本来の美質に富む是等多数の婦人から起つて来る事を疑ひません。(…)自分は敢て問ふ、仏蘭西の婦人は何故に自ら奮ひ立つて各自己の教育を男子と齊しくすることを謀らないのか。我等女子が現代文明の幸福に均霑せん為め——我等自らの幸福の為めとのみ云はず、我等の良人及び子女の幸福の為め——要求すべき正当な第一の権利は教育の自由である。自分は仏蘭西に於ける婦人運動が過去三十年前に比して甚だ手温いのを不思議に感じます。と申して英国の婦人の様な過激な運動を望まないのは勿論です。伶俐な仏蘭西

の婦人達は必ず之に對する立派な御意見があらませう。自分分は其れを聞きたい⁽¹⁵⁾。

革新的な発言を強く訴えるこの執筆は、フランスの雑誌「Annales politiques et littéraires」に依頼されていた。そのフランス語訳は雑誌に掲載され、読者の反響をよび、晶子の記事に意見を投稿する者が数人いたが、その時、晶子は日本に帰っていた。そこで、鉄幹は読者の投稿の中から三つをえらび、『巴里より』に掲載したのである。フランスの学者Claire Dodane (クレール・ドードヌ)によると、当時のフランスのフェミニズム運動についての情報をあまり持ち得ていなかった晶子は、売春排除を求める活動の存在も知らなかったため、フランスの婦人に対する性急な評価を出してしまったのである。⁽¹⁶⁾

五、日本の女性の自立を促す晶子

欧州旅行の通信を集める『巴里より』には晶子の西洋女性への言及が多く、フランス、イギリス、ドイツなどの女性の観察は日本の女性の社会的状況との比較基準となり、これによって日本女性の社会地位に関する晶子の認識はさらに明確になった

のである。

歐洲の女は何うしても活動的であり、東洋の女は静止的である。静止的の美も結構であるけれど、何うも現代の時勢には適しない美である。自分は日本の女の多くを急いで活動的にしたい。而うして、其れは決して不可能で無い許りか、自分は歐洲へ来て見て、初めて日本の女の美が世界に出して優勝の位地を占め得ることの有望な事を知った。⁽¹⁷⁾

女性の主体性と身体を肯定する処女歌集『みだれ髪』(1901(明34)年)、戦争を否定する詩「君死にたまふこと勿れ」(1904(明37)年)、そして出産の体験を踏まえる評論『産屋物語』(1908(明41)年)等の作品において、女性としての意識を強く示す晶子の作品では、女性の社会的地位の向上を求める傾向が1911(明44)年以降、つまり欧州旅行の数カ月前からますます明確になる。その切っ掛けは、同年6月6日に平塚らいてうが与謝野晶子を訪れ、女性の自立を促す雑誌『青鞥』の企画に協力を依頼しに来た時であった。1911(明44)年9月の『青鞥』の創刊号に晶子は「そぞろごと」と題する12篇の詩を寄稿したのだが、その第一篇目である「山の動く

日が来る」は、女性の社会的地位に関する問題意識を表した晶子の代表的な作品だと言えよう。

「山の動く日が来る」

山の動く日が来る

かく言へど、人われを信ぜじ。

山は姑く眠りしのみ。

その昔に於いて

山は皆火に燃えて動きしを。

されど、そは信ぜずともよし。

人よ、ああ、誰これを信ぜよ。

すべて眠りし女

今ぞ目覚めて動くなる⁽¹⁸⁾

「山の動く日が来る」においては、山のイメージが女性の力の隠喩として表現されている。その山は昔のように、再び火山のような力を示す時期になったと表現しており、女性の力を強調するのである。女性に目覚めて動くという訴えは国家の良妻賢母という静止した理念に対する反感を表すのである。また、前述した「巴里の旅窓より」にも見られるように、東洋の女性

の静止する状態を行動する姿勢に変えるという呼びかけが含まれる。このように晶子自身は「目覚めて動く」というスタンスをまず欧州への旅によって実施したと言える。そして、後に作品に表れてくる女性の原型的な生命力は晶子の詩歌創作および執筆活動の軸になり、それは出産、女権拡張、教育、政治などの問題を取りあげながら展開していく。

そして、晶子にとって、自分の創作活動における「欧州の旅」は次のように位置づけられている。

欧州の旅から帰って以来、私の注意と興味とは芸術の方面よりも實際生活に繋がった思想問題と具体的問題とに向うことが多くなった。私は芸術上の述作を読む場合にも芸術的趣味の勝ったものよりは生活実感の勝ったものを余計に好むようになった。忙しい中で新聞雑誌の拾い読みをするにも、芸術上の記事を後廻しにして欧州の戦争問題や日本の政治問題に関連した記事を第一に読むという有様である。

これは私の心境の非常な変化である。私は最近一兩年の間に、日本人の生活を、どの方面からも改造することに微力を添えるのでなければ、日本人としての私の自我が満足

しないのを臍^{はら}ろげに感じるまでに変化しているのであった。⁽¹⁹⁾

僅か5カ月の欧州滞在は自己の世界観を重要な発展に導いたと述べる晶子が、文学表現者として、社会改良をめざすべきという意識を持つようになる。そして、社会における女性差別の原因の一つは日本の教育制度の在り方にあると述べる。晶子はロンドンを訪れた際、イギリス女性の自立に感心しており、男性に近い教育を受けていることを女性の自立の理由に挙げている。教育によって、民権の面でも女性性は男性にほぼ対等であると理解する晶子は、帰国後、女子の教育と経済的な自立を促す執筆を重ねている。

女子の生活の独立は、女子自ら経済上に独立することが重大な一因であると知って世の職業婦人に同情し、婦人の職業が増加して行くのを喜び、教育を受けた若い婦人が進んでそれらの職業に就くという新しい風潮を祝福した。⁽²⁰⁾

また、1919年5月号の『中央公論』に出版した「教育の国民化を望む」では、男女を識別する日本の教育制度を批判し、

教育は特権ではなく、女性も男性と同様に高等教育を受ける権利があるという立場から日本の教育制度の改革を提言する。そして2年後、晶子は、文化学院の創立に積極的に貢献する。

六、詩「戦争」以降の能動的な女性と帝国

帰国直後の晶子の創作においても新しい展開がみられる。『帰ってから』(『新小説』、1913年2月号)、『午後』(『中央公論』、1913年3号)、『明るみへ』(1913年5月から9まで『東京朝日新聞』連載)、『戸の外まで』(『我等』、1914年1月号)などの短編小説が出版され、どれもパリへの旅およびパリ滞在を舞台にする自伝的な部分が多く含まれている。以前より晶子が小説という表現方法に挑戦しているが、詩歌創作ほど人気を得ることはなかった。ただし、これらの作品は晶子の文学的な視点の変化を表している。即ち、現実を以前より作品の題材とすることである。詩歌の表現世界においても、『みだれ髪』の恋愛の至上主義に比べると、自分が生きる時代への視線が強化される。そして、上記の引用で述べられる通り、1914年に始まった第一次世界大戦の際、晶子は次の作品を作る。

「戦争」

大誤算おほまちがひの時が来た、
赤い恐怖おそれの時が来た、
野蠻ひろが濶い羽はねを伸し、
文明人が一齊いっせいに
食人族しょくじんぞくの仮面めんを被きる。

ひとり世界を敵とする、
ゲルマンゲルマンじんの大胆さ、
日耳曼人の大胆さ、
健気けいげさ、しかし此様な
悪の力あくのちからの偏重へんちゆうが
調節ちようせつされずに已やまれよか。

いまは戦ふ時である、
戦嫌いくさきらひのわたしさへ
今日けふ此頃このころは気きが昂あがるる。
世界の霊たまと身と骨が
一度に呻うめく時が来た。

大陣痛の時^{だいじんうのとき}が来た、
生みの悩みの時^{うみのなみのとき}が来た。
荒い血汐^{あらいちしほ}の洗礼^{せんれい}で、
世界は更に新しい
知らぬ命を生むであろ。

其^それがすべての人類に
真^まの平和を持ち来^{きた}す
アラム精神^{アラム}でなくて何^なんであろ。
どんな犠牲^{ぎせい}を払^はうても
いまは戦ふ時⁽²⁾である。

△世界の霊と身と骨が▽呻^{うめ}き、戦争は陣痛に例えられている。
その陣痛を体験している世界は、出産する身体というイメージ
である。『みだれ髪』において生命力の意味として頻出する「血
汐」のイメージは、この詩「戦争」においても戦争に伴う△荒
い血汐の洗礼▽に例えられ、命を産むと共に流れる血という意
味を持つ。このように、世界の再生を導く平和な時代を構築す
るのである。「戦争」という詩は戦争賛美の作品とは言い切れ
ないが、そこに晶子の戦争観における大きな矛盾がみられると

言えるだろう。戦争は野蛮な行為でありながら、その行為によつて新しい秩序を形成し、平和の新時代が実現されるという論理がこの詩にはあるからである。この矛盾は15年戦時中の風潮においても解決されないままで、アジアにおける日本軍の戦争行為を賛美する作品に通ずる与謝野晶子の文学的生涯の重要で、複雑な側面を呈しているのである。

しかし、「戦争」という詩の根底に、欧州旅行後に深めた国際的精神、女権拡張の主張、現実への眼差しという要素が結合している。つまり、晩年の国家主義に潜在的に通ずる側面を孕んでいるこの詩は、女性の身体イメージを通じて女権拡張を訴える「山の動く日が来る」等の『青鞥』の時期の作品と同様の原動力に基づいている。

上記の詩が題材としている戦争へは、欧州ばかりでなく日本も参戦していた。1914年7月に大隈内閣が、詩の第二連にある△日耳曼人▽、つまりドイツに宣戦布告をしたことを晶子は意識していたはずである。したがって、平和と世界秩序をもたらす女性の身体の能動性を賛美しながら、その能動的な身体は統治区域を拡大しようとする日本帝国の戦争行為を正当化するという読み方も可能である。第一世界大戦の参加によって、わずかに数年間だったが、日本帝国は南洋庁を得ることになり、

山東省にあるドイツの植民地を英国海軍と一緒に占拠したのである。そして、晶子のフェミニズム観において中心的な位置を占める女性身体の能動性は、世界舞台における日本帝国の能動的な政策と重なる一面を示している。

この時期の晶子の他の作品においては、政治体制を支持する姿勢が見られるどころか、社会における不平等を政治家に訴える作品も見られる。例えば、1912年3月号の『三田文学』に掲載された詩「或る国」は、中国ほど根気がなく、浅くて利己主義な国であり、アメリカほど富がないのにアメリカ化し、うら安い国として日本を非難する。1915年12月12日の『読売新聞』に掲載された詩「駄獣の群れ」では、平民の正義、愛、血、汗、自由、幸福を／彼等駄獣の群れ／に例える政治家に寝藁の如く踏みにじられる／という政治体制に対する非常に強い反感を示している。

そして、この時期の歌にも「あさましき戦^{いくさ}のために思ふかな世は冬のまま四とせ続くと」、「前なるは先ず骨となり後なるは飢えて青めり戦国の民（『火の鳥』）のように戦争の浅ましさを訴える作品がみられる。上記の歌と同様に、詩「戦争」にも非人道的で野蛮な行為としての戦争認識が見られ、「君死にたまふこと勿れ」のトルストイ風の人道的精神の非戦論と通ずる

性質をもつだけでなく、男性社会への反論という一面をも示し、与謝野晶子の女性論として機能している。⁽²²⁾

結び 西欧紀行の国際的な抱負、帝国主義の国際的な抱負

1912年の欧州旅行の動機であった晶子の遠心的精神は、美術の再発見や女性解放に対する意識を深めたコスモポリタンな雰囲気になれ、彼女の文学的生涯における転機であったと言える。晶子自身はこのような認識を明確にもっている。

欧州の旅行中、到る処で私一人が日本の女を代表しているような待遇を受けるに及んで、最も謙虚な意味で私は世界の広場にいる一人の日本の女であることをしじみと嬉しく思った。私の心は世界から日本へ帰って来た。私は世界に国する中で私自身に取って最も日本の愛すべきことを知った。私自身を愛する以上は私と私の同民族の住んでゐる日本を愛せざにいられないことを知った。そして日本を愛する心と世界を愛する心との抵触しないことを私の内に経験した。⁽²³⁾

「君死にたまふこと勿れ」以降、トルストイの人道主義を受容していた晶子は、『青轡』に加わった翌1912(明45)年に鉄幹と一緒に約半年欧州の旅に出る。その折に、晶子が国際的な環境を体験し、日本を愛することは世界を愛することと矛盾しないという意識が芽生えるようになる。すなわち、世界の市民という意識が形成されてくる。そして、先述した「戦争」という詩も世界の平和を賛美する内容からみると、一種の博愛的な人道主義の精神を認めることができる。女性の解放問題を探り上げる詩作品と文章においても、地球と一体化する女性の身体表現が見られ、それは晶子の浪漫主義的また人道主義的精神がフェミニズムの思想と結合する。

このように、人道主義、国際的精神ならびに女権拡張論には、昭和時代の日本帝国主義に出会う時に、外地拡大のための戦争を肯定する晶子の姿勢が見えてくる。この帝国を肯定するような姿勢の背景には、晶子のもう一つの旅がある。それは満州とモンゴルへの旅である。1928(昭3)年に晶子と鉄幹は南満州鉄道株式会社に招待され、満蒙の旅に出る。当時の満州は日本帝国の国際的な発展の象徴であり、晶子自身『満蒙遊記』において長春(Changchun)とこの地名の国際的な雰囲気

言及し、カリフォルニアかブラジルより見たいところだと述べている。

また、ハルビンに向かう汽車の中でロシア料理とドイツビールが出され、晶子が数年前に欧州に向かった旅を思い出す。満州とモンゴルを走る鉄道は、植民地の経済発展をもたらす日本帝国の文明と技術を表すものであった。その経済的発展によって日本が満州の人々に平和と生活状況の改善をもたらすという期待が『満蒙遊記』には見られる。満州を走る日本の国鉄は、「山が動く」に例えられた女性の動的な力と同様に、動く日本の帝国の象徴である。そして他者である満州、韓国、中国との国際講和を作ろうとする帝国は、晶子の目から見ると人道的で、国際的な性質を持つていたはずである。1932(昭7)年の上海事変の際に、晶子は「紅顔の死」(同年4月号の『冬柏』)および「日本国民 朝の歌」(同年6月号の『日本国民』誌別巻「日本女性」という詩を発表する。事変に対するこの2篇にみられる見解では、日本に対する敵意識を持つ中国軍は、日本帝国が実現させようとする国際講和を妨げているとしている。それに対して、身体を桜の花のように散らばす日本の兵士は、八北と南へに行く日本の帝国の平和のための殉教として描かれている。

このように、1912年の欧州旅行と1928年の満蒙紀行以降の帝国主義を支持する姿勢との接点を指摘することができる。すなわち、帝国主義に対する晶子の肯定的な姿勢の背後には、洋行期に抱いていた人道的でコスモポリタンの精神、ならびに女権拡張の理想に満ちた晶子の近代への抱負があったと言えるのではないだろうか。そして、巴里で出会ったロダンと同じ名前を持つ晶子の四番目の息子、オーギュスト(Auguste)に、1942(昭17)年には、戦地に赴いた時に捧げた「水軍の大尉となりて我が四郎み軍にゆくたけく戦へ」は、この接点を象徴するようにみえる。

参考文献

- 与謝野晶子「ロダン翁に逢つた日」、与謝野晶子著『我等何を求めるか』、天弦書房、1916(大5)年。
- 翁(逸見)久美「晶子の「明るみへ」について」、早稲田大学国文学会編『国文学研究』31号、1965(昭40)年。
- 木俣修(他)編『定本與謝野晶子全集』第2巻、講談社、1980(昭55)年。
- 木俣修(他)編『定本與謝野晶子全集』第3巻、講談社、1980(昭55)年。
- 木俣修(他)編『定本與謝野晶子全集』第4巻、講談社、1980(昭55)年。
- 木俣修(他)編『定本與謝野晶子全集』第9巻、講談社、1980(昭55)年。
- 木俣修(他)編『定本與謝野晶子全集』第11巻、講談社、1980(昭55)年。

- 木俣修(他)編『定本與謝野晶子全集』第14巻、講談社、1980(昭55)年。
- 中村文雄の『君死にたまふこと勿れ』、泉書院、1994(平6)年。
- 逸見久美「作家自伝(3) 与謝野晶子「明るみへ」、日本図書センター、1994(平6)年。
- 入江春行『与謝野晶子とその時代：女性解放と歌人の人生』、新日本出版社、2003(平15)年。
- 逸見久美(他)編『鉄幹晶子全集』10巻、勉誠出版、2003(平15)年。
- 逸見久美「評伝与謝野寛晶子 明治篇」、八木書店、2007(平19)年。
- 茨城のり子「詩人評伝シリーズ3 ―君死にたまふことなかれ」、童話屋、2007(平19)年。
- Claire Dodane「Yosano Akiko (1878-1942) Le séjour à Paris d'une Japonaise en 1912」Mirail (Toulouse) 大学出版編『Clio. Histoire, femmes et sociétés. Voyages』(クリオー歴史・女性と社会。旅特集) 28号、2008(平20)年。

註

- (1) 与謝野晶子「明るみへ」金尾文淵堂、1916(大5)年、38頁。
- (2) 本稿において、便宜上では、一貫して鉄幹という名前を用いて与謝野寛を指すことにする。
- (3) 「青海波」における主流なモチーフとして、出産の苦しみおよび子育て、また海外にいる鉄幹に対する思いを挙げられる。冒頭にフランス語で「A Mon Mari Bien-aimé」(最愛のわが良人に捧げる)と記されていることも、鉄幹の渡仏が歌集におけるモチーフとしての位置にあることを多く物語っている。
- (4) 与謝野晶子「明るみへ」、前述、472頁。
- (5) 翁(逸見)久美「晶子の「明るみへ」について」、早稲田大学国文学

- 会編『国文学研究』31号、1965年、99頁。
- (6) 与謝野晶子「巴里まで」、逸見久美(他)編『鉄幹晶子全集』10巻、勉誠出版、2003年、93・94頁。
- (7) 逸見久美作家自伝(3)与謝野晶子「明るみへ」、日本図書センター、1994年。
- (8) 入江春行、『与謝野晶子とその時代』、新日本出版社、101頁。
- (9) 与謝野晶子「ロダン翁に逢つた日」、与謝野晶子『我等何を求めるか』天弦書房、1916年、106・108頁。
- (10) 有島武郎の評論「叛逆者(ロダン)に関する考察」が掲載された1910年11月号の『白樺ロダン記念』。
- (11) 与謝野晶子「巴里旅窓より」、逸見久美(他)編『鉄幹晶子全集』10巻、上述、124・125頁。
- (12) 同上、125頁。
- (13) 与謝野晶子「倫敦より(二)」、逸見久美(他)編『鉄幹晶子全集』10巻、上述、139・140頁。
- (14) 与謝野晶子「巴里における第一印象」、逸見久美(他)編『鉄幹晶子全集』10巻、上述、194・195頁。
- (15) 同上。
- (16) Claire Dodane [Yosano Akiko (1878-1942) Le séjour à Paris d'une Japonaise en 1912] Mirail (Toulouse) 大学出版編『Clio. Histoire, femmes et sociétés. Voyages』(クリオ―歴史、女性と社会。旅特集)28号、2008年、198頁。
- (17) 与謝野晶子「巴里の旅窓より」、逸見久美(他)編『鉄幹晶子全集』10巻、上述、126頁。
- (18) 『定本與謝野晶子全集』8巻、講談社、1981年、180頁。
- (19) 同上、244頁。
- (20) 与謝野晶子「鏡心燈語」、1915年2月号『太陽』初出。『定本與謝野晶子全集』14巻、講談社、1980年、243頁。
- (21) 1914年8月の『読売新聞』初出。『定本與謝野晶子全集』第9巻、講談社、1980年、120・122頁。
- (22) 晶子の「君死にたまふこと勿れ」におけるトルストイの影響を述べた先行研究に、中村文雄の「君死にたまふこと勿れ」(泉書院、1994年)が挙げられる。これは、この作品を徹底的に分析する書籍である。
- (23) 1915(大4)年2月号の『太陽』初出。『定本與謝野晶子全集』14巻、244頁。